

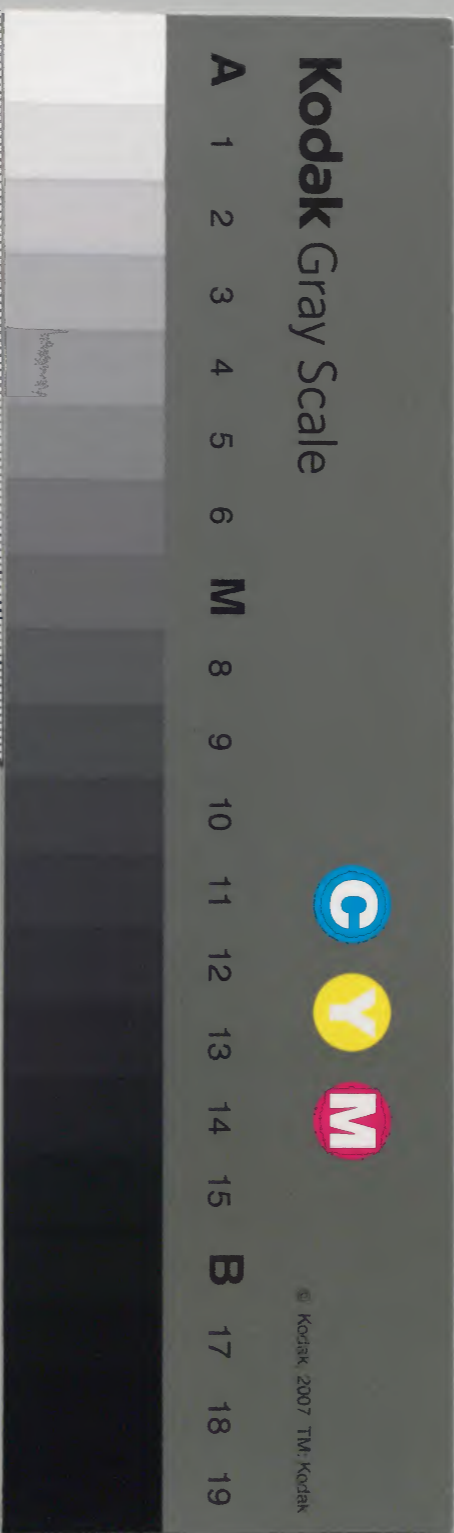
百草露

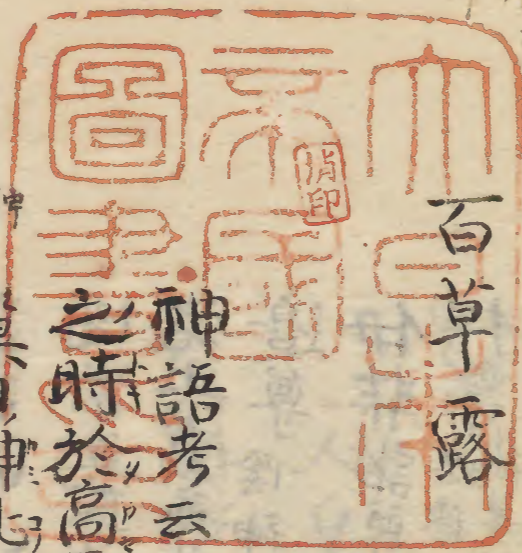
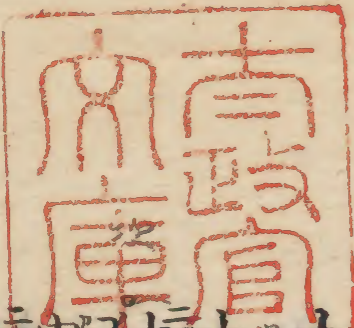
三

大政官文庫			
		一	和
		二	書
		六	門
		八	
		五	
一	九		
〇	七		
冊	函	架	

內閣文庫			
		一	和
		五	書
		八	
		〇	
二	函	架	
二			
四			

內閣文庫	
番號	和 11685
冊數	10 (3)
函號	212 306





百草露

神語考云 天地初發考多古事記上卷云天地初發
 之時於高天原成神名天之御中主神次高御產巢神次神產
 巢日神此三柱並獨神成生而隱身也次國稚如浮暗而久羅
 下那洲多陀用幣玩之時如葦牙因崩騰之物而成神名宇麻
 志阿斯訶比古遲神次天之常立神此二神亦獨成坐而隱身
 神上件五神者別天神次成神名國之常立神次豐雲野神此
 神而隱身也成坐神名字比地神次妹須比智近神次於角枝
 神次妹活枝神次意富斗能智神次妹大斗乃辨神次於母陀
 琉神次妹阿夜訶志古泥神次伊邪那岐神次妹伊邪那美神

西... 天... 神... 高... 御... 產... 巢... 神... 次... 神... 產... 巢... 日... 神... 此... 三... 柱... 並... 獨... 神... 成... 生... 而... 隱... 身... 也... 次... 國... 稚... 如... 浮... 暗... 而... 久... 羅... 下... 那... 洲... 多... 陀... 用... 幣... 玩... 之... 時... 如... 葦... 牙... 因... 崩... 騰... 之... 物... 而... 成... 神... 名... 宇... 麻... 志... 阿... 斯... 訶... 比... 古... 遲... 神... 次... 天... 之... 常... 立... 神... 此... 二... 神... 亦... 獨... 成... 坐... 而... 隱... 身... 神... 上... 件... 五... 神... 者... 別... 天... 神... 次... 成... 神... 名... 國... 之... 常... 立... 神... 次... 豐... 雲... 野... 神... 此... 神... 而... 隱... 身... 也... 成... 坐... 神... 名... 字... 比... 地... 神... 次... 妹... 須... 比... 智... 近... 神... 次... 於... 角... 枝... 神... 次... 妹... 活... 枝... 神... 次... 意... 富... 斗... 能... 智... 神... 次... 妹... 大... 斗... 乃... 辨... 神... 次... 於... 母... 陀... 琉... 神... 次... 妹... 阿... 夜... 訶... 志... 古... 泥... 神... 次... 伊... 邪... 那... 岐... 神... 次... 妹... 伊... 邪... 那... 美... 神...

上件自國之常立神以下伊邪那美神以前并神代七代云云
 之何是此五神七代大神等々皆自然成る皇神等
 一そいつとこれ神の御子よちあそ此大神等の成るせ
 七之此あいうえわかさなほまられ五言七言おのく自
 然尔生さると五神七代大神等よりあつのおとれ備
 そこのほりさると此五言七言よちあつていづる音と
 ちとほり七十言をふりてそと千万此言語とちとれ云
 國常立尊陽神五行德 國狹植尊陽神水德 豊斟淳尊陽神火德
 泥土煮尊陽神木德 沙土煮尊陽神大戸道尊 陽神金德 大戸
 邊尊陰神 面足尊陽神土德 惶根尊陰神 右天神七代と云
 伊弉諾尊陽神 伊弉冉尊陰神 天照太神大神御子 忍穗耳尊 瓊々
 杵尊忍穗耳尊 彦火出見尊瓊杵尊 鷓鴣草菅不合尊彦
御子

火々出見尊
御子

右地神五代也云々

人皇本紀

彦五瀬命 葦不合尊第一皇子戰場中流矢薨祀紀州名草

郡寬山

稻飯命 熊野浦逢逆風恨怒自投海中成鋤持神

三毛入野命是亦同時没海往常世國

神武天皇 雅名狹野尊諱神日本磐余彦尊

手研耳命 父崩御後欲害弟却爲弟等被射殺

神八井耳命一名研耳余祀和州十市郡多神社

綏靖天皇 諱神濟名川耳尊母事代主命之女

神武天皇母玉依姬生而明達年十五立為太子後娶日向國
吾田邑吾平津媛生二子一名手研耳命次名研耳命四十五
歲時謂兄及子等曰昔高皇產尊大日要尊授豐葦原中國於
瓊々杵尊以來至今百七十九萬二千四百七十四歲也我聞
鹽土翁曰東有美地蓋六合之中心矣何不造都乎諸皇
子對曰可也 甲寅十月五日出船軍着速吸水門國神珍彦
來先導賜名推根津彥又着豐前菟狹地主菟狹津彥菟狹津
姬出饗應以菟狹津姬妻于天種子 乙卯三月六日備州建
行宮留三年名高嶋宮 戊午三月十一日着攝州難波逢難風
仍云浪速國 三月十日着河草香村欲越越瞻駒山有國神長

髓彥者先年饒速日命降臨時以妹御炊屋姬為妃懷孕未產
速日尊神殞遺言曰若男子者名味閉命即賜宝物果男子名
味閉命我甥而天孫之嫡也除之不可有異君邀孔舍坂大戰
五瀨命中流矢苦痛天皇引軍巡南至紀州名草竈山五津命
遂薨去自此乘船於熊野浦暴風危急稻飯命三毛入野命共
恨曰我等太神之苗胤而母龍神女何為逆波如此乎跳入海
中殞命天皇到荒坂誅丹敷戶咩處有國神吐毒氣皇軍大狼
狽於是饒速日命之一男天香語山今名熊野高倉下居矣忽
自武甕雷夢中拔新劍即獻之天皇仍捧之天皇喜令毒中者戴
劍則平愈雖赴大和路山徑難行時頭八咫鳥飛來鄉導曰臣
命隨鳥先驅至菟田其國神有兄猾弟猾者弟來伏兄者拒則
誅之既而至吉野時名井光者自井中出先而有尾人也又有

有作築者是亦有尾磐排別之子吉野因崇之始祖也又有作
 築取奥者包首擔之子也阿太鷓養之始祖也共來版又有磯
 城八十梟師赤鯛八十梟師者強敵也天皇祭天神地祇而悉
 滅之 十一月四日與長髓彦戰不利時金色鴉來止弓弭其
 光如電遂敗之誅戮而天下普平治天皇喜教民作家宅畝傍
 山之東南檀原經營 庚申九月四日娶事代主命之女媛踏
 鞞五十鈴命為正妃 辛酉元年正月朔日肇即帝位 四十
 二年正月三日神渟川具尊為皇子 七十六年三月十一日
 天皇崩百二十七歲葬畝傍山東北陵
 神武天皇の御製 人代とより三十一字の始
人代とより三十一字の始
人代とより三十一字の始
人代とより三十一字の始
人代とより三十一字の始
人代とより三十一字の始

ちと伊須氣余理此狹井河 大和国此家行幸給ひ一
 宿御寐甲て余理姫入内給ひ 給ひつ々特ももせつ々
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ
 志げ 志げあまの繁く ひやさやハ弥清の若原の志げ

高千穂二上山 日本書紀神代卷下云皇孫之離天磐坐排
 分天八重雲稜威之道別而天降於日向襲之高千穂峰矣既
 而皇孫遊行之狀也則自穗日二上天浮橋立於浮渚在平所

而齋完之空國白頓丘覓國行去到於吾田長屋笠狹之碕矣
神代口決云千穗之今宮崎也

釋日本紀云千穗二上同所異名
神代纂疏云龍重疊也千穗地名今日向國白杵郡智鋪鄉是

也二上者衆山之中二峰獨秀故得名
日本書紀第一一書曰到筑紫日向高千穗穗觸之峰

第二一書曰降到於日向穗日高千穗穗日二上天浮橋
第六一書曰于時降到之所者日向襲之高千穗漆山峰矣

到于吾田笠之御崎遂登長屋之竹嶋
神代口決云漆山即二上山也

旧夏記曰天津彦火瓊杵尊天降坐于筑紫日向襲之穗
觸二上峰云詔曰此地者向韓國直道求笠狹之御崎而朝

日直刺夕日照國也故云此地吉地矣詔底津石根宮柱太敷
而高天原揮椽高知坐矣

古事記曰天降坐于笠紫日向千穗之久士布流多氣
續日本後紀承和九月十三代實錄天安二年十月日向高智保神

統日本紀曰日向風土記曰白杵郡智鋪鄉天津彦火瓊杵
尊天降於高千穗二上之峰時天晴冥昏夜不分人物失道物

色難分於茲有土蜘蛛名大鉗小鉗二人奏言皇孫以尊御手
拔稻穗為韌投散四方必得開晴如火鉗所奏搓千穗稻為韌

投散即天開晴日月照光因曰高千穗二上峰
和名鈔曰日向國白杵字須智保鄉

我國泰伯後之辨 晉書卷九十七倭人傳云倭人在帶方東南大
海中云男子無大小黥面文身自謂太伯後

日本書紀纂疏云一上吳太伯姬姓逃荆蠻斷髮文身以避龍蛇
之害而吳瀕東海本朝皆黥面推髻故稱太伯之後此蓋附會
而言之然吾國君臣為天神之苗裔豈太伯之後哉号姬氏國
者出誌公讖文考韻書姬婦之美稱天照太神始祖之陰靈神
功皇后中與之女主故國俗或假用之惟依字不依義也
又云二卷藤原兼良著晉書卷九十四曰倭人自謂太伯之後然吾國君
臣皆為天神之苗裔豈太伯之後哉此蓋附會而言之矣
垂加翁云夫謂太伯之後國史無其徵則無稽之言源親房藤
原兼良議之是也釋曰月修國史用太伯之說朝議禁止之矣
又云噫儒生惑姬氏國之言而欲誣太伯附之佛者託大日靈
之名欲牽大日合之是皆犯周禮造言之刑違國神正直之誨
實神聖之罪人也

年山打聽云湯淺新兵衛著 備前岡山侍臣吾日本此祖々吳太伯也末也云

論吳族林春齋東國通鑑二百七十三卷後本此序を著す

本此帝祖を誣す以て神皇正統記卷二昔日本々三

韓や同種也し書の有るを桓武天皇此御代亦焚す

一由見えし也

戲草云此國吳泰伯後こと云るを唐世咸亨と云年未も

り時此國の人り海より來り云出せり夏之唐書子見え

見とバ其説の妄事明け神社啓蒙云白井宗或問日本者為泰伯之裔也有諸曰不知

夫泰伯來日本之事經未載之而吳已為泰伯之後而為國則以吾王國為姬氏國寔無所據耶而然驗之豈故有吳服吳器之類宜哉世人惑于此姑舍之可

山崎敬義云通鑑前編周元王元年越滅吳下曰自太伯至夫差二十五世今日本云吳泰伯後蓋吳已其支流入海為倭也金氏亦無稽而言之也元王三年我王考熙三年也萬多親王姓氏錄松野連出自吳王夫差也然則所謂支流入海者松野之先耳

又云文會筆錄顧應祥惜陰錄十曰近閱西山墨談曰史傳多

言日本國乃徐福之後

又云仁山金氏通鑑前編云云漢書東夷傳云云其王阿母氏自言初王天御中主其後以尊為名以此觀之倭人自開闢以

來已有之徐福所據乃海中之洲耳倭國自若也謂太伯後者本出於晉書倭人既通中國漸知古書籍乃其自託言恐未可

全信顧氏亦曾知我

野馬臺詩云東海姬氏國俗儒因言天照太神泰伯也以其姬氏而謂之女體三讓額秘在室藏此謬妄之甚伊勢神宮諸記元々集等絕無之野馬臺詩未見之載籍之中俗謂室誌織而詩傳所不道也假令作之異僧謾語固不足據矣噫儒生惑姬氏國之言而欲誣太伯附之佛者託大日靈之名而欲牽大日合之是皆犯周禮造言之刑違國神正直之誨實神聖之罪人也

日本水土考云以此國号姬氏國者日本以閉有立女帝故異邦稱言之因以為泰伯之高者非也惟日本俗以姬為女子之

通稱以彥為男子之通名彥之和語日子也姬之和語日女也此固之人皆為日神之裔之謂也或以日神為女体之儀亦有所以乎閉立女帝之事亦從水土自然之理乎主位者俱少陽之數也素門所謂女人以少陽數成貌之盛衰女人以七之數致盛衰之變故艮地所主女人盛衰之處

兩朝平壤錄四卷曰日本故倭奴國也通鑑前編以為吳亡子孫入海為倭故曰吳泰伯後墨談以為倭國有徐福祠謂福後故中國呼倭為徐倭皆非也蓋仁山批國語寡人達王于甬句數言而推之非實有所本徐福居檀夷二州号秦國但屬之倭耳史記卷六始曰方士徐市等入海求神仙云云又卷百十八南王安傳曰使徐福入海求神異物云云徐福得平原澤止王不來松下見林云王字非也徐福來于我為氓

後漢書百十五東夷傳曰倭在韓東南大海中云云秦始皇遣方士徐

福入海求蓬萊神仙不得喪誅不敢還遂止此州

又曰徐福觀國光來止脫於虎豹之秦為在熊野三山之閒今

按神武天皇第五代孝昭天皇御宇吳泰伯之後裔夫差歸我

國是今松野氏之先也見錄第七代孝靈天皇御宇秦徐福避

邦之暴歸我國為民而往紀熊野邑共慕我國之德化而為臣

為民者也異邦之人聞此等之事而遂云日本者泰伯之後云

或云徐福之後皆年代遙隔不熟考妄言而後世非之說兩朝

錄出者宜哉泰伯徐福之前數千歲有我國有我天皇何云遙

後吳秦之裔乎外夷人而有此言亦分也我國之儒生等幸左

祖之助長者實神明之誅伐不可遁之大罪人噫可不慎乎

羅山文集卷二十五神武天皇此論云東山僧圓月辨不妙

喜菴を建嘗て日本紀成修すまじも朝議協へざりて果
さず遂ふ其書成火もと余竊に日月の意を思ふに諸書
に日本を以て吳泰伯の後とす夫泰伯荆蠻に逃て髪を
断身成文て蛟龍と共ふ居る其子孫筑紫に來り想ふに
必ず時の人にて神とせん是天孫日向高千穂に奉る降
るに謂汝當時疑ふてあまを拒ぐもの或はこれに汝
こそ大己貴神順服せしもの謂汝其蛟龍に雜り居成以
て海神交會れ説ある汝其齋持來る所れもの或墳典索
丘蚪斗れ文字に紛る故に天書神書の説に汝其三に
多び天下を以て讓る成以ての故に遂に三讓に兩字成
伊勢皇太神に揚る汝其牽合附會かくれ如くと云ふ
もろもろ其理有に似たり夫天孫誠に若天神の子と云ふ

何れ畿邦に降るに西鄙葦爾の僻地に來るや何ぞ
早く中州の善國に都せずと云ふ瓊々并火と出見鷹草に
三世日向に居て没すや神武四十五年東征し安藝
國に至り明年吉備國に至り三年に及ぶに舟楫を修
兵食成あつ免其河内國に至り長髓彦と大己貴衛坂
に戦ひすや山々を克を獲り遂に長髓彦を殺し
大和に入り橿原宮とす川且夫神武の雄略を以て其難
うくの如し又何ぞや天孫に大己貴に神武の長髓彦
を或拒ぎ或は相戦ふもの怪むべし想ふに其大己貴長
髓彦も我國の酋長なる神武に代て立りの汝嗚呼姪
氏の子孫本支百世萬也ふ至て君とすべし亦盛んあ
すや彼強大の吳を越し成さるる心ごとくも我邦に

宝祚天地と窮る余つふ於て以て大伯の至徳を
夏を信ず設使圓月復生すといふも余が言を何とか
せんや云云。又云晋書子載日本ハ益夏后少康ハ高こと少
康の庶子會誓ふ封せし身茂文げ髪を断江睢の陂小處
元龜龜真盤と伍成りし遂ふ越の國とある是よりして是を
みよハ吳越共子我國子近一葦此抗る往來此易き故以
て太伯の子孫とす少康の後昆やと云ふ故也又未知
云々云々云々推て以て太伯ハ夏后とせば必ず同月と
同く衆を時ふ獲んる也日本紀の旧義不從ひて我國
固有ハ神聖と敬せんよら亦可ふ云々云々
豊葦原瑞德國 細戈千足國 浦安國 磯輪上秀真國
虚空見日本國 大倭日高見國 玉墻内國 大八洲國

口決云日本者日始出吾國之義也五志部正通著

纂疏云吾國於三國在東北海中

史記漢郊祀志曰東北神明舍西方神明之墓也註張晏曰
神明日也

因云東々日頭ハ略言 西ハ日沈ハ略訓 北々陽氣
此根さー來るの義 南々皆見の畧さるん歟

經籍後傳記云小治田朝暇陪天子日出處天皇致日没處天
天子隋書又同

元々集云今所以總八洲名大日本者由大日要貴降靈故自
有此名

唐書曰日本古倭奴國也自以其國近日所出故以日爲号
後漢書謂大倭國即今日本也

日向風土記云大足彦天皇之世幸兒湯郡遊於丹裳之小野
謂左右曰此國地形直向扶桑宜稱日向也

● 文献通考曰日本與扶桑別傳 ● 本草綱目曰東海日出

處自然生神木 ● 禁辭註曰扶桑木名日出其下

● 淮南子註扶桑東方之野也 ● 和漢三才圖會云扶桑國在

漢國東 ● 扶桑國傳云扶桑國在大漢國東二万里在中

國之東其上多扶桑故為名扶桑似桐初生如笋國人食之

實如梨而赤績其皮為布為衣亦以為綿作板屋無城郭有

字以扶桑為紙 ● 杜子美詩至今有遺恨不得窮扶桑 ● 中

唐詩集中劉長卿同崔載華贈日本聘使

憐君異域朝周遠積水連天何處通遙指來從初日外始

知更在扶桑東 ● 白雲四方八千丈即是扶桑第一花

● 後鳥羽天皇榮西賜宸翰額曰扶桑最初禪窟

● 桂川氏云伊豫風土記云上古有二大木一曰桂木一曰臣木

其實曰樅今桂木の朽残するもの伊豫郡森と云地北海底

より出又同所桂谷と云地あり其邊一里の閉成堀バ古木

を得於土人桂木此根こともいふ二種共不同物なりて世

小稱する扶桑木之清王漢洋の香祖筆に桂板とあるりの

是也

● 因云扶桑集紀齊名夫木集藤原長清扶桑略記皇因

扶桑拾葉集水戸黄門扶桑紀勝貝原氏他々枚舉ふ

以てよらる

● 日本水土考云今之号世界者其周圍三百六十度而無過万
五千里即日本東西之徑度較計之則莫餘三十二倍然則日

亦大國也。大日本國廣東西五百余里南北三十里余高
 二千二百八万四千八百八十二石餘。城百四十八。諸大名へ
 出た所の石高千七百六万千六百六十石御旗外御家人其
 外出了所此石敷多し。

惣人数 二千六百九十二万一千八百人

内 男千四百四十万七千一百七人
 女千二百五十一万四千七百九人

神社 三十八百六十一

延喜式神名帳云日本六十六國大小神祇惣數三十一百三
 十二坐内大四百九十二坐 小二千六百四十坐 社數三
 千八百六十一
 寺院四十五万五千四十一、四十一、下 天台宗 千八百二十ヶ寺

真言宗 一万八千ヶ寺 律 九千百ヶ寺 法宗宗 五千三百五ヶ寺

禪宗 一万七ヶ寺 浄土 十四万二千ヶ寺 遊行宗 六十七ヶ寺

大念佛宗 千五百ヶ寺 西本願寺 四万五千八ヶ寺 東本願寺 七

願寺 八万百二十ヶ寺 日蓮宗 八万三千二十ヶ寺 高田宗 七

千五百二十ヶ寺 佛光宗 八千五百二十ヶ寺

俗説辨云肥後侯の臣鉄炮奉行伊澤十郎左衛門長秀弓燭竜氏延享年中、人ふて 我日本万國尔

勝多る事ハ言成りて、國を瑞穂と号し米穀豊子性味
 うけり、さ支万國此及ばけり、支西土の人毎年我稻を載
 て歸れ、且國初時素盞鳥尊五十猛命等樹種を播植して日
 本國中悉く青山子爲り所ふし今亦至る衆敗れしか、
 木徳の盛に國初天照太神を大日靈尊と申奉り日徳成
 以て天下を君臨し給ひ開闢より今亦至り一姓天下を有

給へて是万国の及ばざる所火徳此盛に開闢以數万歳一
日斤時も外國不侵さす西土のやむことば夷狄は為る
國戎奪つれ君をさす也耻辱を千古に殘せし同日に語る
べうらび是上徳の盛に西土中古より金銀之絶一會子成
用ゆる事五百年通鑑統編輯録等此記所見るべし我國
對馬に銀は陸奥ふ金花咲くも今に至る金銀の乏し
み外國是を慕ふて万里の波濤をものご毎年互市を求る
ふ至る日本劔工の妙達外國に聞さる所ふして其劔は堅
剛銳利我國外よりす所ら沙汰に及ばば近世朝鮮征伐の
時兩國劔戟に利鈍諸書ふ記す所考ふべし金徳の盛に西
土黄河濁水城郭を破り山岳を崩し天子泣く自埋草を負
ふに至る如此うし史記ふ見え大學衍義補に民此害と記

せり我國水清く味甘く潤下の性成得て五谷を滋長し城
山岳を闕潰すも夏女に豈水気を盛ふるふらけりや
因云萬葉集天平咸宝則天寶二十一年此年四月改元五月十二日越中守
此館ふおぬて大伴宿家持賀陸奥國出金
を多に御代榮えんと東あるみちのく山ふ金花とく

武備志曰日本刀極剛利中國不及也

歐陽氏日本宝劔歌曰百金傳入好事手佩服可以禳妖凶

懲必録朝鮮國柳成竜所著也号西屋曰倭刀皆三四尺精利無比

通證云裕川士此書日本書紀稱本邦為中國華夏稱異邦為

西土西蕃是史之大体也垂加翁云中國之名各國自言則我
是中而四外夷也是故我曰豊葦原中國亦非我得也粟山潛
峰曰彼此皆自称中國蓋對外國之通稱而同非言此土在堪

輿之正中也至其或為神國為神州且海內為天下而為夷為
蕃則雖俱非九々總域之通言亦各國自稱無相害是以淡海
公奉勅撰職貢掌遠人謂玄蕃万多親王區別姓氏秦漢之裔
牧之諸蕃源親房亦曰彼以我為東夷猶我以彼為蕃也近世
墮乎市井文不振乎措紳情乎曰典而不之觀或呼元明為中
自稱為東夷殆幾乎外視萬世父母之邦而無蔑百王憲令之
著

燕之苑日涉云立乎天壤之閒者東西南北各取中於其所居而
命之何必中於彼而夷於此哉古哲王蓋有見乎茲故自稱而
中國稱之異域曰東天皇可謂得大体矣且殷周之盛荆吳稱
為夷春秋已往入列諸夏則夷變為夏今也夷入夏則夏變為
雖聖人之邦禮樂文物為幾乎熄矣何必中於彼而夷於此物

茂卿賈仲尼自稱夷著學則稱鳩舌大宰純者其徒之巨擘也
亦相壽張以夷自居仲尼曰君子居之何陋之有二氏不能以
君子居而自居其陋不亦悲乎且居其國而夷其國何無忌憚
之甚遼人猶禁稱蕃者四訓之云

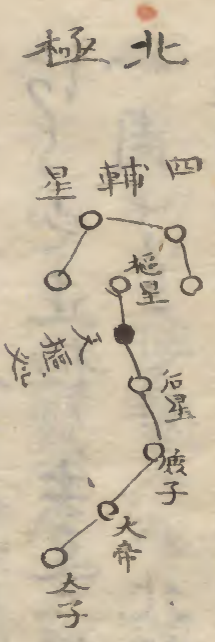
南北極

北辰是也

々天地を貫てく不動此两点譬や車轂の如く

磨志瞬の如く周天を廻りて環轉れ樞ありのこ北
辰と云ハ星亦非す形も無ハ目も見えず其極子近北星
成りりよ各付て北辰星といふこ此北極星を動さざるよ
りて正極去夏二度半のこ衆星と同く十二時ふ
一周するこ譬へバ北極地を出る事三十六度の國と云ふ
極星ハ三十二度半或ハ三十八度半を見ゆる時ある此五
度の差ひを折分して一度半減増減して北極出地三十

六度と定むる



極星出地高下一度南北二十五里東西相去度数準之但陸路準三十里余

天中ふ正當する地々北極一分も地を出ず南極も地ふ入らざれば地是之然也西土の内より北極地ふ等し地地より西土陽城地より直南九千里去て其地ふ當るこて力サル馬加抜ふ日本ソモニダラ海上二千四百里 黒人國クハリ。パンコウ。コラハス。チタナアタ。等こ

日本諸国北辰出地度数 山城國皇都三十五度半 強 武藏國江戸 紀伊國熊野三十四度 越中國富山三十六

度半強 能登國七尾三十九度 土佐國高知三十三度半 肥前國長崎三十二度半 大隅國佐田岬三十一度弱 薩摩國鹿兒嶋三十一度 對馬國三十六度 陸奥國南部盛岡澁谷四十度七分 同國碓関四十一度四分 同國三馬屋四十二度二分 出羽國秋田四十度半

常 衆星 天 靜宗動天恒星 土 火 日 金 水 月 地 大地三千四百三十七里七十四

日輪を三百六十五日二十五刻ふして一周天と云 月輪ハ二十七日七時四十二分ふして一周天 戌一年二度 旋るこ 木星ハ一年三百三日七十刻ふして一周天 火 星ハ一年三百二十一日十三刻ふして一周天 水星と金

星とる日輪を心ふして廻る故如圖日輪外外二の輪
つゝ是其旋る道之土水火の三星より旋る夏火ふとや

一里ハ我國三十
六里の積り也

皇極經世書曰天之神棲乎日人之神棲乎月

木生火故日東出不炤北以水也夏至日炤三面亦不北月西
生者金生水也月不北者從日也又借日而光者也又陰不獨
成者也

日本書紀舒明天皇八年正月朔日食と見えし是國史亦
日蝕を記せし始也

春秋二百四十二年日食三十六何其少哉唐二百九十年
日食百余何得多哉且春秋所書今推之有不當者不可曉

焉 唐開元二年二月日食不應姚宗上表賀通鑑

長慶元年九月當虧不虧韓愈表賀狀 襄公二十一年

九月十月頻食二十四年七月八月頻食

正月一日謂之三朝師古漢書注曰歲之朔月之朔日之朔
故謂之三朝朝之義猶旦也又謂之四始正義史記注曰謂

歲之始時之始日之始月之始也云云

周易指曰日主天月主地丰主人子丑寅以象天地人

貞丈云天ハ見於所蒼々として天ハ外ハ天と云りの如し
此天ハ世界を包みしる内ハ陰陽の二氣有て伸屈万物を

生ずる之生活するもの如し然也とも心志をわらへば無
心邪るもの然然ふ天命と云ハ天の仰付らるる云か

如し天刑天誅ふと云ハ天れと云る如し雷ハ天怒也

以へば腹立ちく有り又天主事といひ天帝上帝といへ
ば天上の人有り事成掌教といひるがごとく云云。天心天
易曰帝出乎震帝者即指日輪日出乎東方故帝出乎震然
則帝者天帝也

源氏物語藤の裏葉子四月朔日吉海といひて詞に次子月と
いひてぬまをもちり朔日を月といひておのれをいふも
七日を一月とする夏のはら此朔日ハ八月に夏成云
よや今も七日成一週りと云

五雜俎曰景龍文館記曰景龍四年正月二十八日晦夫二
十八日亦可為晦耶
徒然草九段れ文よつとありり日といふも松といふ
より夜半さぐるまで人れ所といふはけりいふこと云

又兼好法師の歌

いねまよふ人ふあらしぬ身の程やみそふ近ま曙れ存
按ふみまうら三十日ありてつありり月隱の略る也

蘆葦内傳十一月を霜月十二月を雪月と書す

或時神君性高ふ御尋有らるる毎月朔望の礼ハ如何なる
故と問はさるる性高對云さるる日月は時を尊ぶりの
事よ朝日を日成始を祝ひ十五日ハ月の満ちを壽き
しよを申上りる然とハ日月並ニ星を祝ふべき義こと有
しよらんバちを二十八日成二十八宿よあそ、星は終り
とて唐ふを祝ひ申すのより申上りて以後我國ハ
礼も始えらるる二十八月ハ御禮慶長年中より定
るる。按ふ當時將軍家よて二十八日の御礼毎月を

おく正月二四七十二月此五月のみ
一月を牟月と云ハ毛都月と云ハ其毛都の約を牟月
と云ハ毛都の約を牟月と云ハ其毛都の約を牟月
里月之草木れ芽を張り出すハ二月之其久佐れ三言の約
ハ伎ちと云ハ伎とのとも云べく又草ハ略くともすべく佐
良と婆里を韻通へり三月成也與比と云ハ草木伊也於比
の月之二月ハ芽成張三月ハ繁る故ハ弥生と云いやの心を略す
草木成つとぬを上二月ハ云一ウバ譲り月の名ハ多
ク他の月と相對へぬ云ハ六月をみる月と云ハ加美那利
月れ上下を略けり十月ハ陰月ハ雷ハ鳴止故ハむらへ
て此名あり雷成つとぬと云ハ事古のつとて七月を
布美月と云ハ保布と美月の上下成略云ハ七月ハ穂

を合リ万葉ヲ布久年をバ布々万里と云ハ成布くと略又
ほくのみにツマシの春秋二月三月ハ草木れ萌茂ると
りて云秋三月を稲りて云ハ八月成波月と云ハ保波利
月表上下を略ツリ稲ハ云ハ八月ハ穂を張九月を奈
我月と云ハ伊奈我利月の上下を略ツハ稲ハ九月ハ
納むるハ十二月を志波須と云ハ登志波都留月れ上下
を略き波をりとの如し都也須を通ハツマシ語意考
正月ハ三陽三陰二二れ月少て陰ハ陽ハ偏ハ
故ハ年中の吉月とす二月の中と八月れ中ハ五穀の神を
祭ルも昼夜長短ふく寒うら暑のハ中和此時好く成
以て
七十二候 日ハ十二時あり五日ハ六十時ハ是甲子の一

周之五候終て氣候易る故、五日を一候と云一年三百六十日とて七十二候と云、之三候一氣と云是十五日二時五刻余と云此氣六ツ六氣を時と云九十一日余之時四、春夏秋冬之四時といふ是年也

天五氣内經 寒 暄 燥 濕 風

日月星辰麗乎天而明、艸木禽獸麗乎地、暗昧飛者有羽、走者有足、鬪者有距、摯者有爪、觸者有角、穿者有牙、艸則艸、木則木、其類雖同、松則摎、杉則直、牡丹春、茱萸秋、芳狐則赤、烏則黑、馬則賴、人虎則食、人鶴鳴、人好、梟鳴、則人惡之、水則潤、下火必炎、上此物之不齊也、既如此矣

五星又緯曰 歲星木 熒惑火 太白金 辰星水 鎮星土

日月五星曰之七曜又曰七政

夜月此名 三日月朔 上弦二十八日 望月十五日

十六夜月既望 立待月十七夜 居待月十八夜

待月十九夜二十日 二十日月下弦 二十三日月有寐

明下旬ノ月 但大ノ月ハ十六日を望月トシ小ノ月ハ十五日戌望月トす

大陽八尺二寸二分一厘四毛八弗 大陰二分一厘七毛五弗 微私東測定 一万里を一寸とす 大陽一箇の大火球より是を測るより全徑八十二万二千一百四十八里地球七分九厘六毛

夜國ハ晝夜シキニテラルと云春分より秋分までを夜之黄昏過の雀色今夕暗し秋分より春分までを昼と云日亦遠た國なる故より明るき夏より日輪の大鬼燈籠といふ見え出波なる海面より周りをる

霞 東雅云霞未詳倭名鈔云唐韻引日邊赤雲也
注又說文雲日氣相薄也見えて則晨霞ふじつもの
しして此の朝霞もいも云苗刺日とも豊旗雲入日刺ふ
いも云いもの今俗朝ヤケ夕ヤケともいふカスミ
赤彩の万葉よかと云いハ赤義こと云赤色をアカと云ア
を発語ハ詞ニカキヤクと云るが如し其色ハ火の焼く如
くふるくヤクと云ヤケと云語を合せて呼ぶと云るカと
云詞ふるく俗ハ霞ハヤケとも云る此義ハ日本紀
ハ彩訓でしこと云ハ即染ハしこと云ハ云皆轉語
ハ万葉集ハ歌ハ染讀でしこと云リ 說文曰赤雲氣也
增韻曰日旁之彤雲也 鶴林玉露曰朝霞不出門暮霞行千
里今俗朝ヤケハ雨夕ヤケハ晴るるいふ

博望侯贊曰禹本紀言河出崑崙崑崙高二千五百里余日
月所相避隱為光明

以一月為正月蓋自唐虞已然舜以正月上日受終於文 是
已唐虞月建不可致而歲首必曰正月足以證云云

結夏以十六日為者印度之法也中國以月晦為一月天竺以
月滿為一月則中國之十六日即印度之朔日也攷西域記又
有白月黑月反額沙茶室羅伐拏婆達羅絳陀等月說者謂二
十八宿之名未知是否

春ハ懇也 秋ハ飽也 夏ハアツキク 冬ハヒユルン又
秋を明くりハ明月後賞す

五味 辛ハ輕ク 甘ハ重ク 酸ハ清ク 苦ハ濁也
五色 赤ハ明也 黃ハ氣ハ土ハ中央ハ一ハ大氣華之青

仰く仰視青天 白を著之 黒八階也
五色閉色 緑青黄土 紅赤白金 碧白青金 驕黄土克

水紫黒赤水

外國の回々 韃靼の寅月を正月とす 天竺を月九十六日朔

日とす 紅毛を冬至より十日目を元日とし 四年ふらふら

一日の関有て 別ふ 閏月ありしを以て 延喜式ハ神祇祝詞出雲國造神賀詞ハ十月日波有止毛

今日能生日能足日云云

按ふ体よりしに 此を日用なるを以て 訓とす

日本書紀一書曰天神以太由而ト合之 又云且天兒屋根

命主神事之宗源者故俾太占之下事奉仕

古事記云爾天神之命以布斗麻尔ト相而詔云云

又云召天兒屋根命拔天香山之真男鹿之肩核而取天香山

之婆々迦而令占麻迦那波

萬葉集 天降付天之芳来山 又天降就神之香山

按子天山香山見西域記

奥儀鈔云婆々迦木自笛吹社上之其社在大和國忍海郡笛

吹村

萬葉集 十四東歌 中武藏國 相聞往來九首一

武藏野尔ト部肩烧肩關尔毛不祈君加名尔出尔計利

堀河百首 大江匡房卿

かく山のほのか下ふとてけりぬく廉れ妻はらひ

せせ

平ノ春海

うのやどや誰らの問ん神の代りほつてふ木の生し出ずハ
 榊卷談云はつゝの木の木と云をトする時亀成るく木之大和
 此香山のちるゝ乃木を用ひ給ふ昔より亀のトハ公家
 子傳つゝ今ふり思兼神の香山ハ鹿の肩をぬきて焼
 トしあひしをるゝの木を用ひ給むけしははつゝのれ
 木を今の犬櫻と云木ふ似て實成サクラボと云北國ふく
 ハとツともウハとツとも云とツメガクラともいふ
 季時珍曰亀鹿皆靈而有壽龜首常藏向腹能通任脉故取
 其甲以養陰也鹿鼻常及向尾能通督脉故取其角以養陽
 也乃物理之玄微神工之能事
 貞丈云太占ハ神代れ占ハ鹿の肩骨成抜焼て占ふハ神代

ふち亀ト易占ふとるなり太占の法ハ絶つると思ひし
 上野國貫前大明神へ橋三喜と云神道者參詣元禄九年六月十六日
 其社ハ鹿肩骨成抜て薄くすり淨火成以て占を行ふ其傳
 へ來る神主談由神主を一宮修理ハ右三喜一宮巡詣卷七
 見えし事

又云三種の大赦と号し神道者代讀りのなり其詞ふトホ
 カトエトタメ坎艮震巽離坤乾ハラニタマヘ清てふ
 又坎艮以下を和訓して十二支の名成云類もあや右の詞
 を我詞とするは甚ぶ誤トホカニエトタメト云ハ亀ト
 とく亀ハ甲成焼て占成すふ其亀甲トホカニエトタ
 タメト云五所此名所なり又亀を焼時トホカニエトタ
 メトクハ唱へるは是亀トの詞なり其除の詞子

つゞく龜トレ時坎艮震以下の八卦外名を唱へず八卦
を周易の占よめ龜ト周易各別の占法に混雜をべから
ず云云

兼良曰龜ト術者皇孫天降之時有龜神名曰太詔戸命

釋引龜兆傳注云時神女住天香山龜津比女命今称天津詔

戸命磐窟本章天香山條宜考焉

古事談云龜甲占祈春日南室町西坐太詔戸明神社大和國

添上郡太詔詞神社是也

牟田氏云はくうハ山櫻ニ今世皮を取て曲物とをさくら
筋のニ此木ハ皮横ふえぐる故縦横ふ氣を通ずること
レ故尔龜ト子用甲のこうこう女を縦横ふ氣をめぐら
さんく免子象を取て

登保加美惠美多米とをト家をと龜ト行つと時尔龜甲

小町成付名ニ町ハ甲真中下より上へ立筋を付る下

方方を登と云上方を保と云其立筋の正中と少し上方

中より左の横筋を付る是成加美と云又正中より少下方

より右志端へ横筋成付る是を惠美と云真中を多米と云

かく縦横れ甲を付るさうはくらの木小丸を燃してひい

さうとてさう兆ふて吉凶決定むる真中の兆正し死を吉

なりバ師特朝臣の

思ひうき龜れあすうよまて問はるえめひかりを聞え嬉し

しうあつても多米ハ五兆れ中して人こと我體こと

らむバ戀まかりてかくるよあつて神道問答

和訓栞云三種ハ大枝詞系トホカニエミタメと云を江次

第ふ水火神人土を配當せり神代五行の古語といひて龜
ト傳れ書考へ視ぬし又遠神善視賜の義工々々の古
語タメをくまへの及り云云

○とし子笑賜と云義ふ
らん十龜と云

愚按トホカミと云十龜の義龜を神物也バカミ
と訓エも笑の義ふて工に割るを云狄タメを賜へて
祈り乞れ意ふべし一龜の甲成灼て其縦横の兆を
みて吉凶成ふも十龜兩推一云神龜二云靈龜
文龜六云並龜七云山龜 周易損五爻辞曰十朋之龜
八云澤龜九云水龜十火龜

弗克違元吉
西土々石龜成用い本邦海龜成浮甲を困ぬ龜ト々神祇
官れ執業令云ト部二十人は是也其傳對馬傳伊豆傳常陸傳
の三つらと其下同トラうすといふとも往古々の秘術子

今吉田流ハ伊豆傳に古より龜靈を崇て太詔戸命久慈
真智命と稱し祭祀を奉ずく式子見えし也

後漢書倭國傳曰灼骨以下用决吉凶
魏志倭人傳曰其俗舉事行來有所云為輒灼骨而卜以占
吉凶先告其辞如令龜法視火圻占兆

萬葉集六

ト部子毛八十乃衢毛占ウラハレド雖問君子相見多時不知毛多時乃

今俗便り占として植柘櫛七十二枚ぬるを懷ふして四過ツル子不

過やけ四過ぬるはあまのちさうほさえ過トれ神
と此歌を三遍口うらま唱へ往來の人物語する成聞之其

吉凶を知し云。又石卜橋ト云々云々

日本書紀下神代卷一書曰天照太神乃賜天津彦火々瓊々

杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種宝物又以中臣上祖

天兒屋根命忌部上祖太玉命猿女上祖天鈿女命鏡作上祖

石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五部神使配侍焉因勅皇孫曰

葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地宜爾皇孫就而

治焉行矣宝祚之隆當天壤無窮矣云々三種の宝と稱する

莫々々々々々のみ見但古事記も八咫句瓊鏡及草那藝劍

云云延喜祝辭解

東家秘傳神皇實錄源親房著天御中主與大日靈貴盟宜

皇孫尊天津彦火々々々天皇如八坂瓊之白以妙曲治天下之

政且如白銅マシロウ以分明者行山川海原即提是靈劍天下利萬民

天口事書云皇天宣又天皇如八坂瓊之白之以曲妙天治御

宇乃政且如真經津鏡之以分明山川海原又即提靈劍云

天下天利万民度言壽帝

按之鏡之日見又影見の義玉ハカタマ之上略

劍ヲツラ又キの略訓スルん歟

北畠親房云神器之在天下不異三辰在天上鏡乃日精也玉

乃月之精也劍乃星精也

兼良云以有三光而為天以傳三器為天子今按之鏡為天德

劍為地德玉為人德配三才

正通云玉溫潤仁惠之德鏡清明正直之体劍剛利智慧之莫

東家秘傳云玉表和順心鏡表正直之心劍表決斷心尚書謂

謂之剛柔正真之三德

松下氏云我國以神道設教以神器象道欲其常接同警心而不至忽忘也

熊澤了介云只三種の神器のみ此固れ神書之上古の文字也書も亦一此智仁勇を三種に象よりて示し多り玉の温潤ふるく光明ふるく仁徳ふる象也鏡の靈明ふる能善惡を別ぞ智靈明も象り劍の割ふる能断刺ふる以て勇の神武も象り多る易れ八卦六十四卦の象也如し三種の注解を中庸ふるく如し唐土の聖人其徳一也其道不二也符節を合ふる如し

按史記封禪書曰有司皆曰聞昔泰帝興神鼎一者一統天地万物所繫終也。黃帝作宝鼎三象天地人。禹收

九牧之金鑄九鼎皆寄烹飪上帝鬼神遭聖則興鼎遷

于夏高周周德衰宋之社稷止鼎乃淪没伏而不見

西京雜記曰漢帝相傳以秦王子嬰所奉白玉璽高祖斬白

蛇劍大戴禮曰武王踐阼於鑑為銘曰見爾前慮爾後又潛

頌類書昔黃帝氏液金以作神物於是為鏡凡十有五采陰

陽之精以取乾坤五々之數故能典日月合其明與鬼神通

其意以防魑魅以整疾病此鏡之始也

貞丈云八咫鏡草薙劔八坂瓊曲玉是也三種の神宝

八咫鏡を神代此物今伊勢太神宮此神体今禁中此

内侍所鏡と云々崇神天皇の時新子摸し作ら

因融院の天曆四年九月二十三日内裏焼亡此時摸の神鏡

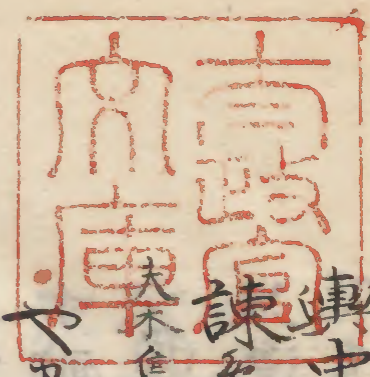
焼損しと云々破りし其質也南殿の櫻木子繫

てけりしと見えり西説の後朱雀院長久元年九月九日
内裏焼亡れ時摸一の神鏡焼損しあり此時の焼破破
て五六寸ばけりけり其闕屑或ハ三二寸むり或三三
粒ばけり拾集て納けりと百練抄に見えり二度焼く
二度目ふち焼破破とくる今内侍所ハ神鏡を云ハ此二
度焼くる鏡の闕屑ハ草薙ハ劔の名ハ天叢雲劔素戔嗚
尊ハ物あり天照太神ハ献トめいし崇神天皇ハ時皇
女豊稚入姫命ハ八咫鏡ハ割て草薙劔とも持てて太
神ハ宮所ハすべと地を求て給い垂仁天皇の時皇女倭
姫命をりつて豊稚入姫命代らせりて宮所を求めハ神
教ハ依て伊勢ハ五十鈴川上ハ宮所を定えり時鏡ハ
劔ハ伊勢ハけり景行天皇の時日本武尊東夷征伐ハ

時日本武尊伊勢へ詣て多し時倭姫命天叢雲劔を日本
武尊に授けりいし以日本武尊是を帯東夷を征伐し給
ハ野火の難ハけりいしと焼草ハ拂い災免れハハ
依て草薙の名あり東夷を平て尾張ハ至り近江ハ膳吹山
の悪神を平んとて山ハ入大蛇の毒氣ハ中り病起り薨
給て其時草薙劔ハ尾張の宮貴姫ハ所ハ在り其劔を
京へ贈て天皇へ献せりて見えて天武天皇朱雀元年
六月己巳刑戊寅^{十月}天皇ハ病歿ハ草薙劔ハ崇り
云ハ依て尾張國勢田ハ社ハ神体と成り内裏ハハ劔
ハ十代崇神天皇の時新ハ草薙劔を摸し作らりて
代々傳へりて安徳天皇まで摸一の神劔傳ハりハハ
平家の一門西海ハ赴り時文治元年三月二十四日二位尼

天皇を抱奉り宝劔を執て海に没しける故宝劔此時に海
に沈み授り求むとて再び出ず永く己びより其後宝劔
に代り何の劔を用ひらるや新に作らるや未詳八坂
瓊曲玉を一名神璽と云云天照太神の御孫瓊を尊ぶ宝物
茂譲り授けり時ふ宝鏡を授けり日本紀に劔
玉の夏ふ又一説に鏡劔玉に三種茂授けり一説に
よりふ日本紀に説く古夏記にも三種とあり古語拾遺に
々八咫鏡及び草薙の劔に二種の神宝を授け給ひ永為天
璽にりり註神璽劔鏡是也とあり然るに神璽と云々劔鏡
二種の惣名よて玉の一名よりり其外律令格式國史等
に鏡劔に二種を擧げ或は神璽之鏡劔との記して玉に
必らず然るに玉一人の代り傳はるる故古記實録に皆

今も玉有る如く未詳後代に至る公家衆并神道家等神
秘深秘と云て有るを無と云無もの成有と云如く
は説茂作り出牽強附會の理説に設け夫を隱秘して神代
より口傳ぬる偽る類あり今世に人志云夏は一向取
ふ足らず唯古書茂信ずべし古書の内にも旧事記の如く
る偽書し有る三種に神璽の夏に付くもの多し妄説多し庸大
に其を惑ふ夏多し又云八坂瓊曲玉に今も有る否の知
ず神鏡に摸しものを二度追焼て碎損し神劔の摸し物
は西海に沈んで出ず是朝廷の王政廢れ万民撫育の志なく
只逸遊淫樂の夏とせし故鏡劔もとび失く終ふ天
下は國郡々武士も奪は給へり聖子太子の佛法茂弘免
ぬひり朝廷衰敗の基ひを開く佛法を信ずとて



心懦弱小好りめ方正ふらざる故逸遊樂を好む之物部尾
輿中臣鎌子物部守屋中臣勝海の賢臣佛法を悪みて君を
諫を奉じ忠臣金言千年後ふ其微著いとしる

師光

同 下まこふち海より玉を草薙のつらに國に室おけりけり

教良



神代より三種の宝傳のりく豊三葦原れまじとれりる
按ふ鏡をカバいと訓ち影見の義又日に見れ義之
或々鑑の略也ともいふ

